

高度な専門能力を備えた臨床薬剤師養成のためのレジデントカリキュラムの研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 憲一 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/569

博士學位論文

内容の要旨及び論文審査結果の要旨

第35号

2017年3月

武蔵野大学大学院

は し が き

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、
2017 年 3 月 18 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の
結果の要旨を収録したものである。

目 次

氏 名	学位記番号	学位の種類	論 文 題 目	(頁)
林 憲一	博士甲第 35 号	博士 (薬科学)	高度な専門能力を備えた臨床薬剤師養成 のためのレジデントカリキュラムの研究	・・・ 1

氏名	林 憲 一
学位の種類	博士（薬科学）
学位記番号	甲第35号
学位授与の日付	2017年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	高度な専門能力を備えた臨床薬剤師養成のためのレジデントカリキュラムの研究
論文審査委員	主 査 武蔵野大学 教授 小 野 秀 樹 副 査 武蔵野大学 教授 豊 島 聰 副 査 武蔵野大学 教授 三 原 潔

論文内容の要旨

チーム医療において高度な臨床能力を備え、他職種と協働・連携できる力を備えた薬剤師を養成するためのレジデントプログラムの作成に資することを目的として、薬剤師レジデント制度の歴史の長い米国病院薬剤師会（ASHP）の専門領域（PGY2 オンコロジー）の薬剤師レジデントカリキュラムと国立がん研究センター中央病院（NCCH）のがん領域の薬剤師レジデントカリキュラムとを比較し、特定の専門領域のスペシャリスト（高度専門薬剤師）養成に必要な事項を検討した。その結果、カリキュラムの達成目標の項目に ASHP との間で一見大きな違いはないように思われたが、その前提となる考え方には違いがあり、ASHP の PGY2 カリキュラムは NCCH のカリキュラムに比べて複雑な状況下でも患者の治療全体を管理できる、課題解決能力を備えた臨床薬剤師を育成するという一貫した考え方に基づき詳細に構築されていること、高度専門薬剤師には臨床推論を駆使して個々の患者に最適な薬物療法を提供できる能力の育成が重視されていること、抗がん剤の副作用や支持療法だ

けでなく、がん患者の合併症を含めた治療全般が対象とされていること、レジデント指導者を養成するためのプログラムが充実していることなどが明らかになった。

また、レジデントカリキュラムの改善点を具体的に検討する目的で、NCCHの薬剤師レジデントと指導薬剤師を対象にスキル評価のアンケート調査を行った。その結果、調剤は6年制卒レジデントも習得できているが、臨床で重要となる類似薬の使い分けや輸液・電解質補正の知識が十分でないこと、TDM（薬物治療モニタリング）/DI（医薬品情報管理）には研究経験が重要で、6年制卒レジデントには医薬品情報の収集・加工能力の養成と並行して臨床研究能力の強化に重点を置いた研修が必要なこと、薬剤管理指導には、症例サマリの作成や臨床推論の反復訓練が有用であること、カリキュラムの習得効果をあげるには、レジデントと指導薬剤師との間で到達目標に対する認識を統一しておく必要があることなどが明らかになった。

さらに、NCCHの薬剤師レジデントカリキュラムが他施設に与える効果（がん医療水準の均てん化に及ぼす影響）を評価するため、当該カリキュラムを用いて実施しているがん薬物療法認定薬剤師研修（3か月研修）の修了生に対して行った研修後の自施設での取組みに関するアンケート調査からは、3か月間レジデントと共通の講義・実技研修を受講後、がん薬物療法認定薬剤師資格を取得したことで、研修修了生の自施設での取組みの範囲は着実に拡大し、NCCHの薬剤師レジデントカリキュラムはがん医療の均てん化に一定の有用性があること、しかし、3か月間の研修だけでは他職種と双方向の協働を行っていくだけの力をつけるには必ずしも十分ではないことなどがわかった。

本研究では、日米のがん領域の薬剤師レジデントカリキュラムの比較などを通じ、高度専門薬剤師の養成には研修目標の明確化（課題解決能力を備えた臨床薬剤師の養成）と目標達成のための具体的な方法論（臨床推論の反復訓練）が重要であること、NCCHのがん領域の薬剤師レジデントカリキュラムには改善の余地があることなどを明らかにした。本研究で示した課題と改善策に関する提言は、施設や専門領域にかかわらず高度専門薬剤師養成のモデルとなり得るものである。わが国でもこの提言をもとに、将来の医療環境の変化に対応できる課題解決能力を備えた高度専門薬剤師の育成に早急に取り組むことが必要であろう。

論文審査結果の要旨

本研究は、チーム医療において高度な臨床能力を備え、他職種と協働・連携できる力を備えた薬剤師を養成するためのレジデントプログラムの作成に資することを目的として、薬剤師レジデント制度の歴史の長い米国病院薬剤師会（ASHP）の専門領域（PGY2 オンコロジー）の薬剤師レジデントカリキュラムと国立がん研究センター中央病院（NCCH）のがん領域の薬剤師レジデントカリキュラムとを比較し、特定の専門領域のスペシャリスト（高度専門薬剤師）養成に必要な事項を検討したものである。その結果、カリキュラムの達成目標の項目自体には日米で一見大きな差はないように見えるもののその前提となる考え方には違いがあることを明らかにしている。

また、レジデントカリキュラムの改善点を具体的に検討するため、NCCHのレジデントと指導薬剤師を対象にアンケート調査を行い、カリキュラムの習得効果をあげるには、レジデントと指導者の間で到達目標に対する認識を統一しておく必要があることを明らかにしている。

さらに、NCCHのレジデントカリキュラムが他施設に与える効果（がん医療の均てん化に及ぼす影響）を評価するため、がん薬物療法認定薬剤師研修（3 か月研修）の修了生に対して行った研修後の自施設での取組みについてのアンケート調査から、3 か月間の研修だけでは、他職種と十分協働していくだけの力をつけるには必ずしも十分ではないことなどがわかった。

以上の結果から、学位申請者は高度専門薬剤師の養成には研修目標の明確化（課題解決能力を備えた臨床薬剤師の養成）と目標達成のための具体的な方法論（臨床推論の反復訓練）が重要であること、わが国のがん領域のレジデントカリキュラムには改善の余地があることなどを提言している。

今回明らかにした課題と改善策に関する提言は、施設や専門領域にかかわらず高度専門薬剤師養成のモデルとなり得るとともに、わが国の医療環境の変化に対応できる課題解決能力を備えた高度専門薬剤師の育成に資するものであり、本論文は学位論文（博士、薬科学）に値すると考える。また、申請者は、博士（薬科学）にふさわしい見識を有していると考えられる。